

生命

久栄荘 (その一)

平成十七年まで、出島の北側に久栄荘いずしまという民宿があった。年老いたおじいさんとおばあさんが営んでいた。

この民宿の海は、尾浦浜おうらはまを向かいにして波が穏やかで、よほど風の向きが悪くなければ、湖の上で釣りをしているようなところであった。民宿も、小さな島を前衛ジャンダルムにして入り江の奥にあり、この二人のお年寄りと同じように静かであった。

私がおこを利用し出したのは、高校時代からの「親友」K君が年に二、三度東京から釣りに来て、必ず食べることにしている小乗浜の「穴子井」あなごじんが発端だった。K君には一緒になれなければ、心中するとまで惚れ込んだ奥さんがいる。五十年近く経っても二人の愛は冷えていないらしい。七十歳にして奥さんと二人、あちこち世界遺産の見物を楽しむという睦まじきである。

彼は穴子井を食べながら「うちのやつにも食べさせたいなあ」と云うのである。「家内は料理が得意なんだ」とのろけまでおまけに付けた。これが、自慢なのか奥さんへの皮肉なのか真意は分からない。ともかく、フライにしてあるとは言え、三陸道、東北自動車道、

新幹線、JRと合わせると彼の家まで五時間以上は掛かる。考えてみれば、よくこれだけの時間をかけて十尾ばかりの魚を釣りに来るものだと思心するが、彼にとっては、私との会話もサカナの中うちのである。私と彼との付き合いは五十年以上にもなり「親友」や「信友」を超えて「心友」としか言いようがないのだ。

彼との出会いは夜間高校の一年生の時だった。当時の夜間部生は中学からの現役生は少なく、全体の二割ぐらいだったように思う。普通科二クラス、商業科一クラス、百五十人の中で彼の成績はトップだった。私は教員になって初の赴任校が母校だったので、過去の記録を知ることが出来た。教員には守秘義務はあるが、母校も無くなっているのです、時効どころか資料そのものが消えている可能性が高い。私の彼に対しての第一印象は、「小生意気なことを云う奴やつ」だった。おまけに成績が良く美男である。私はその頃、赤点を抱えて四苦八苦だったので、他人のことなど考える余裕など無かった。ところがある日、突如彼から声をかけられた。「演劇部に入らないか」と云う誘いだった。私は即そく「ダメだ」と断った。実は、私はその当時、赤面性せきめんしょうで人前で訳もなく顔が赤くなり、授業などで音読を指名されると言葉が詰まって、読める字も読めなくなってしまう性癖を

持っていたのである。誘っている彼は完璧に見えだし、比べて、私の方は劣等感の塊であった。どう転んでも彼の優位は動かず、私の傷はさらに深くなると直感したのである。私の対人恐怖症は重症化していた。その原因のきっかけは何となく分かる。

終戦の翌年、小学二年生の始め、大陸から引き揚げてきた女の子が偶然私の隣席になった。この頃、私はヤンチャで誰もが私の隣の席を嫌っていた。隣の空席は必然だったのである。国民学校一年生は、担任の先生が三人も変わり、登校すると直ぐに家に帰されたのだから、学校とは先生の顔を見て帰ってくるころだと思っていた。学習機能はほとんど果たされず、実力は事実上一年生以下だった。特に私は三月生まれで、同年の学童の中でもとりわけ幼稚だったのだろう。この女の子は地元の子どもが着ていない洒落れた洋服を着ていて、方言を使わなかった。二人は気が合ったわけでもなかったが、ケンカもしなかった。私が先生に指名されて困っていると、少女は指で机上に答えをなぞり教えてくれた。この女の子とは二年間一緒だったが、四年生の初めに組み替えになり、その後、小、中学校で同じクラスになることはなかった。それでも、少女は私に遇った時必ず軽く会釈した。

その頃、私の家は極貧の中にあり、父は若い頃ピアノの個人教授をして暮らしていたらしいが、時代はそれで一家を養うことを許さなかった。父はそれまでの楽器類を売り払い、きやしやな手で鑄掛屋、パン売り、アイスクャンディ売り、日雇い労務者までして家族を養っていた。父は二合の合成酒に酔うと決まって「古閑裕而」氏と共演したことを自慢気に話した。教え子の何人かが音楽の教員になったことも誇りであったに違いない。抗あらいい難い時代の波が足を引っ張る中で、父は我々子どもたちのために、父親としての責任を果たそうと懸命に生きていたのだ。私は七人兄弟の末っ子として誕生したが、すぐ上の兄は七歳年上だから、今だったら、私はこの世に登場しなかったと考えるのが自然である。両親は私を可愛がってくれた。この腕白小僧が、どちらの親にも叩かれたという記憶はない。私も両親には我が儘は言わなかった。

私が中学二年生の夏休みだったと思う。郡山市の麓山公園に全国を移動して回る「動物園」が巡って来た。父はアイスクャンディは売れると読んでいた。「あの如宝寺の一心坂は急で長いから後ろを押してしてくれ」と云うのである。確かにリヤカーに積んだアイスクャンディは重いに違いない。父の苦勞を知っていた私は抵抗もなく

引き受けた。二箱も積んだアイスクャンディはリヤカーのタイヤが横に広がるほど、貨物道路を出発する時から軋きしんだ。父が前を牽ひき私が後からを押した。この日は朝から暑い日だったが、会場はすでに入場者で溢れていて、我々のアイスの旗を立てたりヤカーが着くと人々はわれ先に群がってきた。父はリヤカーから箱を下ろすと、「自分はもう一度仕入れに行くから店番をせよ」と云った。私は物を売るという経験はなかった。しかし、一本三円のアイスクャンディは飛ぶように売れていった。この多数の買い手の中に乙女らしくなった彼女がいたのである。そして、あの時と同じように微笑みながら会釈した。私は暫く呆然とし、客が勝手にお金をおいて、箱の中から自分で品物を持っていくのを見ているばかりだった。これは恋というには余りにも未成熟に過ぎるが、思春期の羞恥心が芽生えていたことは否定できない。この頃から私の対人恐怖性と赤面性が始まった。ところが何と！この重症患者が後日高校の国語の教員になるのだから、人間の将来は「神のみぞ知る」である。よく女は化粧で化けると云われるが、男が化けると不思議な現象が起こるものである。

その後の彼女の足跡は知らないが、彼女の私への刻印は「学業劣

等のいたずら坊主」は免れないところだろう。逢って見たいような気もするが、お互いに古希を越えた話題は、持病や服用薬の話に終始するような予感がする。

ところで、K君の勧誘は執拗しつようだった。「あと一人いれば創部できるんだ」と真剣なのである。私は一週間ほど逃げ回ったが、裏方でいという甘言かんげんに騙だまされてついに落城した。僅か七名の部員は裏方も役者も兼ねなければならなかったのは当然である。間もなく来る発表会では、舞台上に立たなければならない。考えただけでも足が竦すくんだ。案の定、舞台の上で立ちんぼうをしてしまった。私の対人恐怖症はますますひどくなり、学校をやめようかときえ思うようになった。しかし、それを支えてくれたのが、私にはずっと年上に見えた一つ歳上のM君であり、同じ齡としの好敵手ライバルとなるK君だった。演劇部は続けた。もしこの時、演劇部を続けなかったら、私は教員の道は歩かなかつたらう。いや、歩かなかつたであらうと思う。無意識の裡うちに敢えて恥はずかしさの中ちから違ちがった自分を創ろうとしていたのかも知れない。この演劇部は二年後の福島県高校演劇コンクールで準優勝した。(当時、東北大会はなかった)我々は大喜びをしたが、私の対人恐怖症が全快したわけではなかった。仲間も芝居にのめりこん

だ者はいなかった。それどころか、我々はその頃出始めた街頭テレビを見て、歌手の後ろで踊る若いダンサーたちを遠見して「彼らは年齢をとつたらなにをして食べていくんだろう」が一致した見解だったのだ。これは憧れに対しての羨望からではなく、努力や一所懸命さが人間の最高の勲章であり、それが必ず報われると信じるこ
とが出来た時代でもあったからなのであった。